開催地名	神奈川県寒川町
開催日時	令和７年 12 月６日（土）　9:00　～　12:00
開催場所	寒川町立寒川中学校
語り部	草　貴子（宮城県仙台市）
参加者	一之宮自治会・各民生委員児童委員・寒川中学校避難所運営委員会 約 50 名
開催経緯	近年は毎年のように地域に甚大な被害を与える災害が各地で起きていることは言うまでもない。災害は予測不能であるが、その影響を最小限に抑える準備は可能であり、その一つが避難所の開設と運営であり、訓練を行うことで災害時に地域が迅速かつ効果的に対応する能力の向上が求められている。講演を聞き、防災への理解をより深め、自治会をはじめ、参加者、団体同士の顔のみえる関係の促進を図るため。
内容	（１）はじめに 消防庁の語り部のお仕事は 14 年間の月日が経つが、この間にも熊本や能登の地震を始め、日本各地で台風や豪雨による水害、山火事などが起こり、私たちの生活に大きな被害をもたらしている。こういった被害の発生直後は、被害情報や避難所での様子がメディアで大きく取り上げられ、ボランティアや義援金が募られる。支援物資も山積みとなるくらい集まり、また防災や減災をテーマに書籍やテレビ番組が増え、災害に関する意識が高まったかのようにも感じることがある。 ただ、日が経つにつれ、折角培った防災意識が薄れ、用意した防災グッズの消費期限は切れ、どこでどんな被害があったかもすっかり忘れられてしまいがちである。これが風化。初動の支援ももちろん大切だが、インフラの整備、心のケア、産業復興や災害対策の強化など、多岐にわたる息の長い支援が大切と感じる。 14 年前、死者 15,900 人、行方不明者 2,500 人と多くの方が犠牲となった大きな震災があったことを忘れてほしくない。そして、もし次があるとするならば、被害が少しでも抑える術を身に着けてほしい。それが犠牲になった方への供養になるのではないか。 （２）市名坂東町内会の取り組みと東日本大震災 仙台市泉区は内陸のため津波の被害こそなかったものの、ライフラインの寸断、道路の地割れや家屋の被害など大変なものであった。世帯数の多くは働き盛りであったり単身赴任をしていたりといざという時には留守である可能性も高い。日ごろから防災・減災力を身に着けみんなで協力しようと、役員９名全員女性という町内会が設立された。町内会設立２年目には、金融機関にローンを組んで集会所を建設。ライフラインの寸断に備えてオール電化とし、トイレも障がい

	者用含めて２か所設置。集会所で「いつもと同じような生活ができるように」身の回りの物をプロの主婦が見立てていざと言う時に備えて用意した。 買い物途中に起きた、東日本大震災のときは、立っていられないほどの強い揺れ、ガラスの割れる音、人の悲鳴、建物も電柱もグラグラと揺れて今にも倒れそうで、道路に停まっている車もボコボコと上下に動いていた。途中町内の方々が集会所の隣の公園にゾロゾロと集まってくるのが見えてきたので集会所を開けた。女性や子ども約 100 名が避難してきた。4 名の役員で話し合い、避難者の中からリーダーと副リーダーを決め、役員はサポートをする形で運営を行った。サポートの一つとして毎日午前と午後にコーヒータイムを設け交流を図った。この時、電気は 2～3 日。水道は 3～4 日。ガスは 1 カ月後に復旧した。 （３）集会所での避難所解散後の気づきと新しい取り組み 市名坂小学校区避難所運営委員会を開設。町内の方が顔見知りとなり、次の取り組みは、災害での対応力を作る。町内会、連合町内会、民生委員、青年団、PTA など 20 の地域団体をまとめ、行政だけに頼るのではなく私たち地域住民一人一人の声を聞きながら組織として活動していく事にした。行政からの支援だけでは不足するものも多いことから、5 つの町内会から毎年負担金をいただいている。 組織の構成は、総務班・情報広報班・食料物資班・救護班・衛生班・女性コーディネーター班の 6 つからなる。女性コーディネーター班は、女性の困りごと、よろず相談所的な役割。主婦の知恵を出し合って様々なことを提案している。例えば、尿漏れパッドを収容する可愛い手作りの袋やペットボトルを容易に開けることができるペットボトルオープナーの作成、手ぬぐいで作ったあずま袋の制作などがあげられる。 そして、避難所訓練を開催し、いざと言う時にだれでも慌てずに避難所を開設できるようにする取り組みを行った。住民参加型の大規模な訓練ではない。各班が視点を広め実践を通じて力をつける、リーダーのための訓練。避難所においてスムーズで的確な運営ができるようにするものである。 (４)まとめ 　高齢者、障がい者、妊婦の方、乳飲み子のいる方、病気の方、弱者と呼ばれる方、一人一人皆違う。いつ何時くるかわからない災害に向けた訓練を通していろいろな方への対応力を身につけること。私たちは専門家ではない。一人一人が他人事ではなく、自分事として、コミュニティの一人として考える、思いやりを忘れないことが大切と考える。また、これからは在宅避難・自主防災は大事な課題。こういった取り組みを、明日を担う子どもたちに見せることも意味のあることである。

開催地より	発災時や発災後の支援などについては行政だけではやりきれない、どうしようもない、ということを行政の立場ではない草さんがお話してくださったことで、担当として心強く感じた。また、町では近年大災害が発生していないため、改めて自治会や自主防災組織とのかかわり方、町民への啓発活動、発災時の動きの確認などやらなければならないことが多くあることを再認識させられた。